

経済と経営 19-4(1989.3)

〈論 文〉

「経済学者サー・ジェイムズ・ステュアートの形而上学 ——かれのジェイムズ・ビーティ批判によせて——」¹⁾

川久保 晃 志

〈目 次〉

1. 道徳哲学者としてのジェイムズ・ステュアート
2. ビーティによるコモン・センス哲学の展開
3. ステュアートのビーティ批判と実証主義的応答

1. 道徳哲学者としてのジェイムズ・ステュアート

サー・ジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』は、つずいてあらわれたアダム・スミスの『国富論』の全面的な批判と、それに基礎をおいたそのこの経済学の展開によって、ながいこと忘却の淵においやられた。古典派か

1) 本稿は、さきに筆者がころみた翻訳 [ジェイムズ・ステュアート]「ビーティ博士の『真理の本質と不変性についての一試論』第2版, エディンバラ 1771年についての諸考察」他(『経済と経営』19-2, 1988. 9.)の解説を兼ねてかかれたものである。翻訳にあたっては、以下のものを底本にしたが、訳稿の欄外に底本のページ数をしめておいたので、原文との照合は容易とおもわれ、したがって、第3節で引用その他言及するさいには、訳稿のみの指摘をすることで省略する。[Sir James Steuart], *Observations on Dr. Beattie's Essay on the nature and immutability of truth*, the second edition, printed at Edinburgh, 1771, and, Letter from Dr. Beattie to William Cumine, Esq., in

ら新古典派、さらには新々古典派へと展開する経済学のもっとも正統的な流れにあっては、資本主義が過剰生産と不均衡をひきおこす一方で、たえず均衡にむかおうとする、均衡回復の法則をみずからのうちにそなえていることが確信されている。そのために『国富論』は、市場の法則（およびその自動調節機能）と経済的自由主義を基礎づけたものとして着目され、たえず立ち帰るべき古典として再認識されてきた。それからすれば、為政者あるいは国家の機能を強調するスチュアートの『原理』は、『国富論』と和解しえずそれに凌駕されるべきものとして、否定的に評価されこそすれ、積極的な意義が考慮されることはけっしてない。したがって、忘却のなかからすくいだすスチュアート復興の試みは、古典派—新古典派の伝統の外からなされるのであって、まずはマルクスによって、「ブルジョア経済学の総体系をつくりあげた最初のイギリス人」としての再評価がなされ²⁾、ついで今世紀にはいって、有効需要と公共投資の経済学者ケインズの先駆者としての再評価がなされた³⁾。

マルクス研究とスミス研究に独自の伝統と蓄積をもつわが国にあっては、スチュアートは、こうした対立的図式をこえて、重商主義から古典派、マルクスにいたる流れのなかで、スミスの『国富論』にいま一步のところまですすみながらも、その流通視角のために、価値論、資本蓄積論の解明をはたすまでにいたらなかった経済学者として、はやくから身近かにうけとめられて

The works political, metaphysical & chronological of Sir James Steuart, bart., &c., In six volumes. London 1805, Repr. by A. M. Kelley, New York, 1967, Vol. VI, pp. 1–42.

- 2) K. マルクス『[新訳] 経済学批判』(国民文庫), 67 ページ。いま、このようにのべたとき、マルクスが、古典経済学が基礎づけた労働価値論を継承し、資本主義認識の基礎にすえた点を無視しているわけではないことは、いうまでもない。その点からいえば、マルクスを古典経済学の後継者とみなすことができるが、ここでは、古典派、新古典派に一貫してながれる理念を軸に、マルクスその他の諸理論を区別しているにすぎない。

- 3) S. R. Sen, *The economics of Sir James Steuart*, Cambridge, Mass. 1957.

きた。しかも、そうした身近かさが、戦後になって、具体的な検討となってあらわれるのであり、『原理』の意義を「原始蓄積の一般理論」にもとめた先駆的な研究にはじまり⁴⁾、そのごのいくつかの注目すべき研究をへて⁵⁾、最近では、内外のスコットランド啓蒙思想研究の興隆の作用をうけて、スチュアート研究への関心は、一段とつよまるにいたっている⁶⁾。このわが国の研究が、スチュアート復興の試みは本質的に古典派—新古典派の伝統の外からなされるべき性格をもっていることとのあいだに、どのような関連をもって展開されているかは、資本主義と経済学の本質をどう把握するかという問題とからんで、無視しえないひとつの問題点におかれているといえる。その点は、さしあたりひとつの問題として指摘するにとどめざるをえないが、いずれにせよ、近年のスチュアート復興によって、『原理』が、『国富論』とならぶ経済学成立期のもうひとつの完結した科学的体系をなすものであることが、ほぼ

4) 小林 昇「A総説—ジェイムズ・スチュアートと『経済学原理』—」(『小林昇経済学史著作集V』未来社 1977年), 45ページ。

5) 田添京二「スチュアート蓄積論の基礎構造」(内田義彦編『古典経済学研究・上』未来社 1957年所収)。川島信義『スチュアート研究—重商主義の社会・経済思想—』未来社 1972年。和田重司『アダム・スミスの政治経済学』ミネルヴァ書房 1978年。なお、現在のスチュアート研究がよってたつ前提として、ここまでの研究史の動向と問題点を手際よくまとめた研究史的概括に、渡辺邦博「外国貿易の発展・停滞とジェイムズ・スチュアート」(竹本洋編『経済学の古典的世界』昭和堂, 1986年所収)第2節がある。

6) 最近のあたらしい動向に属する成果は、かなりの数にのぼる。それらのうちのおもなものは、註(4)にあげた小林氏の論稿はじめ、同氏の「最初の経済学体系」『歴史と社会』6, 1985., 「マルクスまでのスチュアート—文献史的スケッチ—」『商学論集』(福島大) 50-1, 1981. 7., 「サー・ジェイムズ・スチュアートと経済学における歴史主義」『三田学会雑誌』75巻特別号, 1983. 2., 「サー・ジェイムズ・スチュアート『経済学原理』の成立事情」一橋大学社会科学古典資料センター*Study Series* No. 6, March 1984. (これらは、改題をふくみつつ、すべて前掲『著作集X J. スチュアート新研究』1988年, A-D章に収録されている。以下、引用その他言及するにあたっては、すべて同書による)に加えて、同書57-8, 372-3ページの註に列挙されており、それを参照されたい。

共通に是認されるところとなっている⁷⁾。またそれにつづいて、この先駆的研究を拠り所としながらさらに一段と発展させて、科学的経済学の成立には、スミスのな法学からの独立とはべつに、政治学からの独立という形態も存在したのだという論点や、スミスのな、「労働一般」の発見をもとに価値法則を解明し、そのうえに生産、流通、分配の構造を原理的体系的に解明しようとする、実物分析を主体とした経済学とはべつに、貨幣の作用を中心に経済総体の原理的体系的な解明をはかろうとする、貨幣的分析を主体とした経済学も存在したのだという論点が、あらためて提起されはじめている⁸⁾。

だが、それらの研究は、そうした斬新な問題設定と精力的な追究にもかかわらず、いまだ『原理』全体の体系的な理解をはたすまでにはいたっていない。ましてや、『原理』をこえたステュアートの思想的全体像の把握をはたすなど、まったくおぼつかないことである。なによりも、ステュアートは、もっぱら経済学者として評価されるだけで、哲学者としては、理解されることがない⁹⁾。

7) 註(6)における小林昇氏の諸論稿を参照せよ。

8) 経済学史学会第 52 回全国大会(1988. 11. 5-6.)では、学会史上はじめて、ステュアートが、「経済学の成立—ジェイムズ・ステュアートを中心に—」として共通論題にとりあげられた。そこで報告された大森郁夫「〈最初の貨幣的経済学〉の理論構成」、竹本洋「ポリティカル・エコノミーによる近代社会の発見」(ならびに「商業社会と統治—フレッチャ、D. ヒューム, J. ステュアート—」田中正司編著『スコットランド啓蒙思想研究—スミス経済学の視界—』北樹出版, 1988 年所収)、川島信義「J. ステュアートにおける『近代の危機』と政治経済学の成立」(既刊, 西南学院大学『経済学論集』23-1, 1988. 6)は、それぞれ独自の視点からなされたものの、一様にステュアートの経済学が、スミスとはべつな体系をなして、経済学の成立をはたすものであったという論点を、基調におくものであった。経済学の成立には、スミスのみならず、いくつかの体系が存在したという主張の当否は、成立というときの「経済学」を、どのようなものとしてとらえるかという問題と、きりはなしては、論じることができない。経済学が人間の生活形態を解明する科学であるとするならば、労働価値論を基礎にすえたスミスのな経済学

今日、かれの『著作集』とその復刻版をもつわれわれにとっては、ステュアートが、『原理』のほかに、『ドイツ鑄貨に適用された貨幣の学説と原理についての論考』や『スコットランド・ラナーク州の利害についての考察』、『ベンガル貨幣の現状に適用された貨幣の原理』その他の、時論的な経済学的諸論説を、出版ないし執筆していることを、知っている。また他方で、大陸亡命中に、『原理』にさきだって、『ニュートン年代記の擁護』をかき、帰国して『原理』を出版したのちの晩年には、「ビーティ博士の『真理の本質と不変性についての一試論』についての考察」や「ミラボー氏によって『自然の体系、すなわち物理的・道德的世界の法』と題された書物についての批判的所見と一般的考察」、「神法への服従動機にかんする論考」などを、執筆している。したがって、ステュアートが、経済学的分析をこころみる一方で、哲学、神学、道德学を展開していたことからすれば、かれが、近代社会の特質を、それらの密接な関連のもとに解明しようとしていたことは、容易に推測されるところである。しかも、このような認識方法の特徴は、『原理』においてさえみられることで、そこでは、近代社会の解明が、たんなる客体構造の分析にとどまらず、主体的な人間心理の動機分析と、より経験的な方法的基礎づけをともなうて、こころみられている。

体系に対抗させて、価値論と切断された貨幣的経済学の樹立のうちに経済学の成立をみようとするのは、人間、労働、価値を排除した 20 世紀の、価格論主体の経済学の「純粹科学化」こそを経済学の純正な進歩発展とみなす解釈につながっていくのではないだろうか。したがってその点からいっても、ステュアートと経済学の再認識が、古典派—新古典的伝統か反古典派—新古典派的伝統かという対立的図式をこえた次元においてなされるべきことが、あらためてもとめられるのではないだろうか。

- 9) そうした傾向は、没後まもなくかかれた「伝記」からすでにはじまっている。そのなかで、『著作集』におさめられた「ステュアート伝」だけが、例外的にかりうじて、第 6 卷所収の諸論説に論及している。Cf. *Anecdotes of the life of Sir James Steuart, bart., in The works, op. cit., Vol. VI, pp. 384ff.* なお、ステュアートの他の伝記文献については、竹本洋氏に、入手の労をとっていただいた。記して謝意を表す。

ステュアートの思想的特徴をこのように概観してみただけでも、その拡がりが確認されるが、ステュアート研究の視野をひろげるまでには、まだかなりの距離があるといわざるをえない。『原理』自体の体系的な理解や、『原理』における哲学、神学、道德学的基礎についての考察はもとより、さいきんのステュアート再認識のうごきに呼応して、『著作集』の第5巻におさめられた経済学的論説についての検討は、ようやく手がけられはじめたものの¹⁰⁾、これら第6巻に所収の、哲学をはじめとした諸論説については、いまだ内外ともに、まったく手がつけられていない。また、スコットランド啓蒙思想との関係についても、ほとんど論及されていない状態である¹¹⁾。

したがって、このような状況にたいして、ここでは、ステュアートが、スコットランドのコモン・センス哲学を代表する思想家のひとりであるジェイムズ・ビーティ (James Beattie, 1735–1803) の批判をこころみていたことに着目することによって、かれの思想的全体像の把握とスコットランド啓蒙思想との関係の解明というふたつの課題に、いささかなりとも接近するいとぐちを、つかみたいとおもう。というのも、それによって、ステュアートがたとえ周辺部分に位置するとはいえ、スコットランド啓蒙の思想家たちと共通の土俵のうえで経済学をかんがえ、したがってかれの経済学が、明確にスコットランド的な道德哲学の伝統のうえにたつものであった点が、あきらかにされるとおもわれるからである。

10) 註(6)に指摘した著作に列挙されている該当論稿をみよ。

11) スコットランド啓蒙思想との関係という問題を想定しつつステュアートに論及したものとしては、わずか、註(6)にあげた小林氏の諸論稿(とりわけ「サー・ジェイムズ・ステュアートと経済学における歴史主義」と竹本洋、前掲「商業社会と統治」を、かぞえるのみである。

2. ビーティによるコモン・センス哲学の展開

ジェイムズ・ビーティは、スコットランドのハイランドにある、キンカーディン州の小村ローレンスカークで、小売店をいとなみながら近隣に小農地をかりて農業をいとなむ、まずしい兼業家族の、6人子の末子として、1735年10月25日にうまれている¹⁾。かれが7歳のとき父が死に、以後長兄の助けをかりて勉学をつづけ、1749年にアバディーン大学のマーシャル・コリッジに入学し、その奨学生となる。そして、家族の負担を解消するために、1753年にそこを修了すると同時に、故郷にちかい小村フォードンの教区学校の教師となる。さらに、1758年にアバディーングラマー・スクールの助教師に指名されて、そこにうつったのちの1760年に、マーシャル・コリッジの自然哲学教授ウィリアム・ダンカン (William Duncan, 1717-60) の突然の死によって空席となった後任に指名され、最終的に道德哲学・論理学教授に就任することとなった²⁾。

1) ビーティはこのように、スコットランド啓蒙の担い手たちが圧倒的に地主貴族と聖職者によって占められているなかで、のちにグラスゴウ大学学長となるウィリアム・リーチマン (William Leechman, 1706-85) や国民詩人となるロバート・バーンズ (Robert Burns, 1757-96) とともに、数すくない小農民の出であった。スコットランド啓蒙については、とくにわが国では、そのなかから古典経済学の創始者であるアダム・スミスと『国富論』がうまれたことから、富裕と進歩とともに、それに基礎をおく同市民関係的な社会の形成をめざした「近代的」な思想・文化運動として注目され、またその側面で評価されている。しかし、実像は、そうしたものからかなりかけはなれており、かれら伝統的既成的な階級である地主貴族と聖職者によってになわれた、きわめて保守的でアリストクラティックな運動であった。Cf. N. T. Phillipson, *The Scottish Enlightenment*, in David Daiches (ed.), *A companion to Scottish culture*, London, 1981, p. 340. かれらは、近代社会を、商業と物質的富の生産によって文明化する社会ととらえる一方で、それが、下層階級の富の生産と中上層階級の公共性の追求という二重の機能において実

かれの哲学的主著となる『詭弁と懷疑主義に反対した真理の本質と不変性についての一試論』は、就任してからちょうど 10 年後の、1770 年に世にでる。それによってかれは、ヒュームの懷疑主義哲学にたいする攻撃をこころみた人物としてとともに、トマス・リード (Thomas Reid, 1710–96) によって基礎づけられたスコットランドのコモン・センス哲学の通俗化をはかった人物として、不動の地位をきづくこととなった。しかしながら、今日ではもっぱら『吟遊詩人』の作者として記憶されるにとどまるように、生来、詩的天分にめぐまれた人物で、自然哲学や道德哲学の教授にむかえられるような、

現されるものととらえるとともに、とりわけ中上層階級の富と徳の結合の道德的実践と、かれらによる下層市民の嚮導を、不可欠な契機ととらえていた。したがって、そこでは、地主貴族ら伝統的既成階級の主導と富の生産にたいする徳の実践の優位がうたえられるのであった。この点については、川久保晃志「スコットランド道德哲学におけるカーマイクル、ハチスン、ヒューム」(田中正司, 前掲編著所収)第2節を参照せよ。そうしたなかで、ビーティはじめリーチマン、バーンズが例外的な、数すくない下層小農民の出であったことは、とくに注目されるところである。だが、かれらは、現状にたいしてラディカルであったから歓迎されたのではなく、かれらの知的才能とともに、それが既成体制を擁護しそれに順応するものであったかぎりにおいて、知識人として容認され評価されたのである。また、伝統的既成階級の主導とともに富の生産にたいする徳の実践が強調されていたことからすれば、かれらによって展望された商業 commerce に基礎をおく近代社会像は、分業と市場が一義的に支配する社会像とはかなり異質なものであった。スコットランドの知識人たちにおける近代社会の基礎を分業と市場にみる視点と、国家や道德の契機を重視する視点とのからみあいにかんしては、ヒューム、ステュアート、スミスについても、かんたんに既成のイメージでとらえることなく、さらに厳密な検討を加えていくことが要求される。

- 2) この間の経緯について補足しておくならば、ビーティは、はじめダンカンの突然の死によって空席となった自然哲学教授の後任に指名されるが、おなじ時期に、道德哲学・論理学教授のアリグザンダー・ジェラード (Alexander Gerard, 1728–95) が神学教授に指名されて放棄したために、その席をつぎ、自然哲学教授の席には、かれとともに候補者であったジョージ・スキーン (George Skene, ?) が指名された。

哲学にたいする自然的趣好は、かれにはなかった。むしろ形而上学を嫌悪する傾向にさえあった³⁾。はやくも教区学校時代に詩歌にたいする資質を発揮しはじめ、仲間たちのあいだに詩人として名がとおり、フォードン時代には、『スコッツ・マガジン』に詩を定期的に寄稿している⁴⁾。また、マーシャル・コリッジの教授に指名されるにいたったのも、当時カリスマ的な存在であった恩師のトマス・ブラックウェル (Thomas Blackwell, 1701-67) が、いち早くかれの文人としての才能を見抜き、目をかけた、学生時代の評判もさることながら、直接的には、その年における『創作詩集と翻訳』の出版によってであった。さらに、就任後まもなくして会員にむかえられた「アバディー

3) Letter XXIX, Dr Beattie to Dr Blackwell, July 1st, 1768, in Sir William Forbes, *An account of the life and writings of James Beattie, LL. D., &c.*, 2 vols., Edinburgh 1806, Vol. I, p. 130. 『真理論』の主題と成立経緯をあきらかにした当時の文献で、必須なものとして、この手紙のほかにつぎのものがある。[Anon.], *Sketch of the origin and progress of the Essay on truth, prefixed to James Beattie, An essay on the nature and immutability of truth, in opposition to sophistry and scepticism*, The ninth edition, corrected, London 1820, p. vi. なお、ジェソップによれば、これは、『真理論』第7版(1807年)にはじめて追補された。See, T. E. Jessop, *A bibliography of David Hume and of Scottish philosophy from Francis Hutcheson to Lord Balfour*, Reissued of 1938 edn., New York 1966, p. 98.

4) ビーティの主要著作を、以下にあげておく。

'Poems' contributed to "*Scots Magazine*", 1756, p. 391 ; 1757, p. 258 ; 1758, p. 482 ; 1759, p. 134.

Original poems and translations, London 1760.

An essay on the nature and immutability of truth ; in opposition to sophistry and scepticism, Edinburgh 1770.

The minstrel ; or, the progress of genius : A poem. Book I & II, London 1771 & 74.

Essays. On poetry and music as they affect the mind ; on laughter and ludicrous composition ; on the utility of classical learning, Edinburgh 1776.

ン哲学協会」で報告した試論も、当初すべて文芸批評にかんするものであった⁵⁾。

こうして職業的義務からロックやバークリ、ヒュームの著作をよみすすめていく過程で、ビーティは、それらのあまりの背理の多さにおどろき、かれらの議論にしたがうことの困難を経験し、逆にじぶんの知性をうたがい、哲学研究の能力の欠如を不安視するなど、苦闘の一時期をすごす⁶⁾。しかし、「協会」の議論に参加し、リードの『コモン・センスの諸原理にもとづく人間精神の研究』(1764 年)に接することをつうじて、あたらしい展望をみいだし、懐疑主義の哲学は「危険であるにしてもとるにたりない、用語上難解なだけの体系だ」と結論するにいたる⁷⁾。そして、この確信をもとに、「協会」の会合(1765 年 12 月 10 日)で「コモン・センスと理性のちがいはなにか」と題する試論を報告し⁸⁾、『真理論』の執筆にはいっていった。

A list of two hundred Scotisms. With remarks, Aberdeen 1779 (Scoticisms, arranged in alphabetical order, designed to correct improprieties of speech and writings, Edinburgh 1787).

Dissertations, moral and critical : On memory and imagination. On dreaming. The theory of language. On fable and romance. On the attachments of kindred. Illustrations on sublimity, London 1783.

Evidences of Christian religion, briefly and plainly stated, Edinburgh 1786.

Elements of moral science, 2 vols., Edinburgh 1790-3.

5) のちに出版される『試論集』(1776 年)は、この時期発表された文芸批評にかんする一連の試論から構成されたものである。

6) Letter XXIX, Dr Beattie to Dr Blacklock, in Sir William Forbes, *op. cit.*, Vol. I, pp. 130-1.

7) *ibid.*, Vol. I, p. 131.

8) マコシュとハンフリーズによってあげられている「協会」で報告された論題のリストでは、いずれも、議事録に記載されていなかったためか、この試論の報告者の名はしめされていない。だが、1766 年 1 月 30 日付けウィリアム・フォービス宛ての手紙で、ビーティが「たまたまおこった問題が、さいきんになってわたしに、前回の会合で 2 時間の

このような経過のなかで、ビーティにもっともおおきな影響をおよぼしたとおもわれるのが、「協会」の中心的存在であったリードでもジョージ・キャンブル (George Campbell, 1719–96) でもなく、おなじく同僚で先輩教授であったジョン・グリゴリ (John Gregory, 1724–73) である⁹⁾。かれは、デイヴィッド (David Gregory, 1661–1708)、チャールズ、ジェイムズ (James Gregory, 1638–75、ジョンの祖父) の数学者3兄弟にはじまる有名な学者一族の子弟で、アバディーン、エディンバラ、レイデンにまなんだのち、アバディーンのキングズ・コリッジの哲学、医学教授を歴任し、またリード、キャンブルとともに「協会」の創設者のひとりとなった¹⁰⁾。ところが、かれは、さらに有利な椅子をもとめて、1764年に職を辞し、エディンバラにうつるが (1766年にウィリアム・カリンをしりぞけて物理学教授に就任)、かつて学生としてすごした時代 (1741–4年) とはあまりにもちがう、この都市の変容ぶりと、道徳的頹廃と反宗教的風潮の蔓延に、たいへんな衝撃をうける。しかも、「協会」の会員はじめだれひとりとして、そうした風潮を助長する元凶とみなされたヒュームの懐疑主義を、真正面から攻撃し、事態に対処しようとしないうちに、いらだちをおぼえるまでになる。そこで、事態の重大性と緊急性にたいして、この課題にこたえうる適任な人物として、かれは、かつ

論述の主題をなすヒントを、あたえました」と説明しているところから、それがビーティのものであったと推測して、まずまちがいない。J. McCosh, *The Scottish philosophy ; biographical, expository, critical, from Hutcheson to Hamilton*, Repr. of 1875 edn., Hildesheim 1966, Appendix, Art. II, p. 471. W. R. Humphries, *The first Aberdeen Philosophical Society, Transactions of Aberdeen Philosophical Society*, Vol. V, Pt. VII, 1938, p. 224. See also, Sir William Forbes, *op. cit.*, Vol. I, p. 80.

9) リードは、1764年に出版した『人間精神の研究』が好評をえたことにより、同年にスミスの後任者として、グラスゴウ大学の道徳哲学教授に指名され、すでにその段階でアバディーンから転任している。

10) *DNB.*, Vol. VIII, p. 545.

ての同僚で、同時に職業人として、専門の成果の早期の出版をもとめられていたわかき哲学者ビーティに着目し、かれに期待をかけるのである。なかでも、とくにビーティに期待をかけたのは、かれの詩人としての情動的な感性と熱情にたいしてであった。したがって、グリゴリは、ビーティにさかんに手紙をかき、世相の紹介から、課題、さらには方法にわたって、終始あたたかい助言と激励をおくりつづける。そして、ビーティの詩的才能の利点を發揮させるべく、はじめの段階では、「わたしは、あなたが詩とはべつの面で、世間に知られるようになるのを欲しており、それは、あなたが、真に哲学的な才能を詩的才能とむすびつけた、数すくないひとのひとりだと、おもうからです¹¹⁾」と激励し、その『真理論』の構想と執筆がかなりすすんだ段階になると、つぎのように、いっそう具体的な助言をおくるにいたる。

「それゆえ（読者に一筆者）よまれるためには、あなたは、妥当性と明晰さをもって推理することに満足してはなりません。熱情と優雅さと気力をもってかかなければならず、想像力をあたため、理性の声に耳をかそうとしないひとたちの心に、ふれなければなりません。¹²⁾」

ビーティは、こうした助言と激励にもとづいて、グリゴリの要請するヒュームの懐疑主義の打倒を、期待どおりになしとげようとする。したがってかれは、『真理論』のはじめで、「現代は、原理と実践の双方で、放縦にむかう傾向にあり、懐疑主義的な著述家の著作が、その放縦に力のかす傾向にある」事実を、まず指摘する¹³⁾。そして、この指摘のうえにたって、「この懐疑主義

11) Letter from Dr. Gregory, December 31st, 1766, in Margaret Forbes, *Beattie and his friends*, Westminster 1904, p. 29.

12) Letter XXI. Dr John Gregory to Dr Beattie, January 1st, 1768, in Sir William Forbes, *op. cit.*, Vol. I, p. 110.

13) James Beattie, *An essay on the nature and immutability of truth, &c.*, in *The philosophical and critical works of James Beattie*, Facsimile edition prepared by Bernhard Fabian, 4 vols., Hildesheim & N. Y. 1975, Vol. I, p. 12.

哲学は、わたしには危険であるとおもわれるが、それは、それが独創的であるからでなく、難解で曖昧であるからである¹⁴⁾」とのべるとともに、それが道徳性や宗教に危険で破壊的な結果をもたらす原因が、「徳は一種の悪徳であり、暗黒は一種の光であり、存在は一種の非存在である」と主張するヒュームの形而上学的思弁の「難解さと曖昧さ」あるいは「錯誤と詭弁」に由来することを強調する¹⁵⁾。そのために、ヒュームの懐疑主義へのかれの批判は、形而上学そのものへの批判となって展開されることとなる。そのけっか、「あまりにも精密化した人間知性の研究」は「不明なものとなり、理解できないものとなる」として、人間知性の研究そのものを、すべて形而上学として排除し、それにかわって「ふつうの能力をもつあらゆるひとが、その日々の経験によって検討しうる原理」を発見する方法を対置する¹⁶⁾。こうしてビーティは、形而上学的な理性にかわってコモン・センスを、真偽の知覚、道徳的善悪の知覚の原理として基礎づけるのである。

しかも、グリゴリは、一連の手紙のなかで、以上の点に加えてさらに「キリスト教は、わたしが、それに反対した冷笑をほとんどきかないように、いまや、紳士たちの嘲笑以下にさえかんがえられているように、おもわれます。これには、極端に腹のたつ無礼さと、向こうみずな鉄面皮があります。しかし、わたしをもっとも傷つけるものは、これらの主題にたいへんちがった考えをもつと想定されるひとたちの、まったくの沈黙です¹⁷⁾」と、いらだちの感情をむきだしにしている。ビーティは、この点においても、グリゴリと意見を共通にする。そのために、攻撃をヒュームにむけるだけでなく、かれに真

14) *ibid.*, Vol. I, p. 7.

15) *ibid.*, Vol. I, p. 97.

16) *ibid.*, Vol. I, p. 12.

17) Letter XIX. Dr Gregory to Dr Beattie, June 16th, 1767, in Sir William Forbes, *op. cit.*, Vol. I, p. 106.

正面から対決しないひとたちを、すべて敵対者として、一括して攻撃の標的におこうとする。したがって、ビーティは、ヒュームを攻撃すると同時に、それをつうじて、当時の支配的な思想潮流である穏健派やリード、キャンブルをも、ヒュームにたいする同調者として糾弾しようとするのであった。ビーティと穏健派との関係については、のちにみることとして、ここでは、とくにリードとの関係にしばってみておこう。

ビーティは、リードとキャンブルをとりあげながら、一方で、かれらがヒュームの懐疑主義的哲学の不合理性を批判し、その反宗教的な学説にたいして「嫌悪」を表明する点を、最大限に評価する。しかし、それと同時に、かれらがそれぞれの著作の出版にさきだって、原稿をヒュームにおくり、かれの批評をもとめ、さらには著作の「献辞」や「謝辞」で、かれの知性にたいする賛辞や丁重な敬意を表明する態度を、「敵対者にたいする異常なへつらい」として、非難をなげかけるのである。そのために、リードやキャンブルにたいして、「かれらが、じぶんたちの研究をさらにもっとおしすすめ、みずからを、もっと堅固さと気力をもって表現したらとおもうのです」と、不満を表明する。さらに、かれらにたいするビーティの糾弾はこの点にとどまらず、ヒュームの懐疑主義と無神論をうみだす原因となっている形而上学的推論が、リードとキャンブルにおいても、それぞれの著作の特徴をなしていることにたいして、非難をむけるのである。「かれらは、卓越した形而上学的能力をもち、その形而上学の科学を愛好しています。しかし、わたしはちがいます。¹⁸⁾」

ビーティがリードとキャンブルにおける形而上学的な性格に非難をむけたように、かれらの著作には、たしかにそうした傾向がみられた。とくにリードに、その傾向がつかよくみられた。かれは、ビーティよりもずっと以前にマーシャル・コリッジに入学し、当時の教授陣であるコーリン・マクローリン

18) Letter XXVI, Dr Beattie to Dr Blacklock, *ibid.*, Vol. I, p. 133.

(Colin MacLaurin, 1698–1746), ブラックウェル, ジョージ・ターンブル (George Turnbull, 1698–1748) にまなぶが, なかでもターンブルの影響をつよくうけて, そのもとでバークリ哲学を踏襲していた。ところが, ヒュームの『人間本性論』の出現によっておおきな衝撃をうけ, それを契機に, コモン・センス哲学を展開することとなるのであった¹⁹⁾。かれは『人間本性論』の検討をつうじて, 一方で, 精神を印象と観念の継起に還元し, 観念をことごとくそれらの要素に分解して, それら自身をのぞいてはあらゆるものの存在を粉碎してしまうヒュームの懐疑主義が, ロックの経験的な観念理論の必然的な帰結であることを認識する。しかしその一方で, それが哲学の最終的な結果としてうけいれられることになれば, そのときには, 「じぶん自身が, また自然の全粋組みが, エピクロスの原子のように, 真空のなかにおどる, 束の間の観念になってしまう²⁰⁾」と結論づけるにいたる。こうしてリードは, ヒュームが事物の实在性を否定し, 因果律や自己同一性までも解体しそうになっていることに, つよい危機感をもつこととなる。そのために, 事物の存在はたんに印象と観念, あるいは観念と観念の習慣的な接合にすぎないとした, ヒュームの観念の連合理論にたいして, あらためてその实在性を主張し, しかも人間にそれを知覚する本能的な力能のそなわっていることを強調するのであった。そこで, かれは, あらためて人間精神の作用の探究に着手し, それを「もっとも単純なものからはじめ, いっそう複雑なものにすす²¹⁾」み, そこから, 「創造者の意志以外なんの説明もあたえることができない, 人間の

19) 篠原久『アダム・スミスと常識哲学—スコットランド啓蒙思想の研究—』有斐閣, 1986年, 第7章「トマス・リードにおける常識哲学の展開」は, わが国における最初のリード研究であり, 目配りのきいたじつにいていねいな紹介をおこなっている。

20) Thomas Reid, *An inquiry into the human mind, on the principles of common sense*, in *The works of Thomas Reid, preface, notes and supplementary dissertations by William Hamilton bart.*, second edition, 2 vols. in 1, Edinburgh 1849, p. 103.

21) *ibid.*, p. 104.

構造の、単純で本源的な諸原理²²⁾」として、直接的には人間の五感からなる「コモン・センス」を基礎づけるのであった²³⁾。したがって、こうしたリードのコモン・センス理論は、それが、ヒュームの懐疑主義にたいする批判として展開されただけでなく、ターンプルが、他のランケニアンズとともに、いちはやくハチスンの導入をはかっていた点で、ヒュームが『人間本性論』で克服しようとしたハチスンの道德感覚論はじめ、自然神学、自然的力能論、実践道德の理論等を、ターンプルを経由して、ふたたび知覚理論と道德哲学の基礎にすえようとするものにほかならなかった²⁴⁾。それによって、ヒュームのハ

22) *ibid.*, p. 99.

23) コモン・センスの定義は、以下のようになされている。「われわれの本性の構造が、われわれをみちびいて信じるようにさせ、そして、われわれがふつうの生活関心において、それらにたいして理由をあたえることができることもなく、当然とおもう必要にせまられている、一定の原理が、わたしがあるとおもうようにあるならば、これらは、われわれがコモン・センスとよぶものであり、それらに明白に対立するものは、われわれが不条理とよぶものである。」 *ibid.*, p. 108.

24) ハチスン、ターンプル、ヒュームの関係については、さしあたり、川久保晃志、前掲稿第3節を参照せよ。また、リードの自然的力能論、実践道德の理論については、篠原久、前掲書、第7章を参照せよ。なお、スコットランド啓蒙思想については、近年わが国でも、J. G. B. ポーコクの方法に依拠して、それを、シヴィク・ヒューマニズムと自然法学のふたつの伝統の形成と、後者による前者の克服という展開において特徴づけようとする試みがなされている。だが、筆者上記稿で部分的にあきらかにしたように、わざわざシヴィク・ヒューマニズム等のポリティカル・ラングウィジ・パラダイムをもちいなくとも、自然的力能論や実践道德の理論といった、当時の思想に内在したいくつかの理論パラダイムによって、その本質を十分特徴づけることが可能である。また、スコットランド啓蒙思想の本質というばあい、シヴィク・ヒューマニズムの伝統が自然法学の伝統によって克服されたわけではかならずしもなく、前者の要素は最後まで強調され、それが産業革命後の現状に対応できなくなるとともに、解体していくのであった。ヒュームとジェイムズ・ステュアートは（スミスについては、なおしばらく評価を留保しておく）、のちにみるようにスコットランド啓蒙思想に特有な実践道德の理論をむしろ否定していた点で、そのなかにあってきわめて異質な思想家に属していた。

チスン批判にもかかわらず、前者でなしに後者に起源をおく自然神学、自然的力能論、実践道德の理論等、道德哲学の基本的構成が、スコットランド啓蒙思想の特質をなすことに、決定的な作用をはたしたのである。

ところで、リードが、人間に本源的な自然的知覚力能の存在することを強調するところから、『人間精神の研究』は、直接的には外部感覚をとおしての外的事物の知覚という特定の精神作用の分析に限定されていた。したがって、後期の著作において主として展開されるような、外部感覚とは区別された『人間の知的力能』や『人間の能動的力能』にまでは、論及がおよんでいない²⁵⁾。しかし、すでにこの『人間精神の研究』においてさえ、もっとも単純なものからより複雑なものにすすんでいくことをつうじて「精神の正確な体系、すなわち、われわれの構造の本源的な力能と法則の列挙と、それらからのさまざまな人間本性の現象の説明²⁶⁾」の樹立をはたすことが、最終的到達課題として、はっきり設定されているのである。

リードは、「人間が、精神およびその力能と作用にかんして、かれらの理解と意見を形成するには、ふたつのやり方がある」とのべて、それらに「反省方法 the way of reflection」と「類比方法 the way of analogy」のふたつをあげている²⁷⁾。これらふたつの方法は、前者が、精神の諸作用が発揮されるばあいには、「それらに注意をはらい、それらが親密な思考対象となるまで熟考する」ものであるのにたいして、後者は、ある事物とすでによく知られているものとのあいだに、ある「類似」ないし「類比」をみつけだすものであるというように、区別される。リードは、そうした区分のうえで、前者が「真理にみちびく」あるいは「それらの作用についてのただしい精確な概念を形成することができる、唯一の方法である」とのべると同時に、そのことは「綿

25) 後期のこの二著作をあげておく。 *Essays on the intellectual powers of man*, Edinburgh 1785. *Essays on the active powers of man*, Edinburgh 1788.

26) Thomas Reid, *op. cit.*, p. 99.

27) *ibid.*, p. 201.

密で厳格な少数者」にしか可能でなく、かれらでさえ「おおくの苦痛と労働なしには達成されることのできない、注意ぶかい反省の習慣を必要とする」ことから、ひとびとははるかに後者に信頼をおこうとすると、指摘している。この指摘そのものからは、両者の関係をどうとらえているか、なおあきらかでないが、リードがそれらを多分に両義的にとらえていたことが理解される。それというのも、まずひとつには、コモン・センスによる第二の「類比的な方法」を、理性と哲学の第一の「反省方法」の基礎にすえていることがうかがわれるからである。その点は、つぎのようにのべているところからもうなづける。

「コモン・センスは、哲学のなにも信じず、その助けも必要としない。だが他方、哲学は（もしわたしが比喩をかえるのをゆるされうるなら）、コモン・センスの諸原理よりほかになんの根ももたず、それは、それらから生じ、それらから養分をひきだす。この根から切りはなされるなら、その面目はしおれ、その生气はすっかり枯れ、それは死に、朽ちる。²⁸⁾」

しかしながら、その一方で、「しかし、精神にかんする哲学的探究においては、それ（＝類比方法）は、誤りと錯覚にみちびく²⁹⁾」とのべるのである。したがって、ここからは、リードが理性とコモン・センスを、むしろ多分に対立的にとらえていたといえよう。そのことからうかがわれるように、リードは、むしろ、人間が「ふつうの生活」において獲得する類比による確信と、かれらがそれぞれ保持するしかない反省による内面的確信を区別することに、苦悩したのであった³⁰⁾。その点で、かれはあきらかにコモン・センスと理

28) *ibid.*, p. 101. なお、引用にあたって、カッコでくくられた部分は、原文にその表記があるものについては(…), 筆者による意味の補足については(=…)の記号で区別した。

29) *ibid.*, p. 201.

30) リードが、このような類比方法と反省方法、コモン・センスと理性の並置によって、ヒュームのもつ危険性をのりこえようとしたことについての理解は、水田洋氏の私信によるコメントに負っている。

性の二元論にたっていたと、いうことができる。一方で、ヒュームの印象と観念による分析的な観念の連合理論が、本能ないし日常的な通常的确信と矛盾することのディレンマにたいしては、外部感覚に基礎をおく本能的な確信を強調する。他方、『人間精神の研究』が外部感覚にかんするかぎりでの論究であるにしても、その論及が、理性をふくめ人間精神全体をみすえたうえでなされたものとして、その理論全体の妥当性について、つよく「虚心で洞察力のある少数者」の是認をもとめていた点においては³¹⁾、理性にうったえる方法を採用するのである。そのかぎりかれは、ロック、バークリ、ヒュームら先行する哲学者の側にたつのであった。そのことをしめすものとして、かれは、『人間精神の研究』の「結論」にさきだつ部分で知覚論を展開し、「反省方法」と「類比方法」のちがいについて、つぎのように論じている。

リードはそこにおいて、知覚作用を、触覚によって物体の第一次性質（固性、延長、形態、運動）を知覚する知覚で、経験にさきだつ「自然的本源的確知 natural and original perceptions」と、「これはサイダーの味だ、ブランディの味だ」、「これはリンゴの匂いだ、オレンジの匂いだ」、「これは雷の音だ、鈴の鳴る音だ」、「これは馬車のおおる音だ、友だちの声だ」というように、経験と習慣によって知覚する「獲得知覚 acquired perceptions」のふたつに大別するとともに、それらに、感覚によってあたえられる「自然の証言」と、言語によってあたえられる「人間の証言」や、さらには「自然的本源的確知」と類比的な「自然的言語 natural language」と、「獲得知覚」と類比的な「人為的言語 artificial language」を、対応させて論じる³²⁾。ところが、これにつづいて、知覚が感動 sensation と区別されるべきであるだけでなく、推理によってえられる感覚対象の知識とも区別されるべきであることに関連して、「しかし、可感的対象にかんして、われわれが知覚するものから推論す

31) *ibid.*, p. 95.

32) *ibid.*, p. 184.

ることができる、おおくのことがらがあり、そうした理性の結論は、たんに知覚されるものと区別されるべきである³³⁾」とのべ、そこから、つぎのような結論をみちびいている。

「そこで、精神が、自然的記号の出現から意味された事物の概念と確信にうつっていくには、われわれの構造の本源的な諸原理によるしかたと、習慣、推理によるしかたの、三つのしかたがある。

「われわれの本源的な知覚は、これらのしかたのうちの、第一のもののなかにえられ、獲得された知覚は第二の、そして、理性が自然の行程のなかに発見するすべてのものは、第三のもののなかにえられる。³⁴⁾」

こうしてリードは、「反省方法」と「類比方法」との区分をとおして、「知覚にはなんの推理も存在しない。それに内在する確信は、本能の結果である³⁵⁾」とのべるように、知覚と推理の領域を、自然的本能的な外部感覚の支配する世界と理性の支配する世界として区別する。したがって、『人間精神の研究』は、こうした区別のうえにたって、「類比方法」にもとづく外部感覚をとおしての外的事物の知覚という特定の精神作用にかぎって分析の対象としたのであり、後者の「反省方法」にもとづく推理理性と判断理性の原理と作用の展開が、それぞれ、『人間の知的力能』と『人間の能動的力能』の課題とされたのである。しかし、このふたつの領域は、リードにおいて、べつべつの異なった領域として切断されていたのではない。両者を架橋することに加えて、われわれの精神力能を、本能的な外部感覚の知覚から理性による知的、道徳的な推理力と判断力へ発展させていく論理が、すでに『人間精神の研究』において基礎づけられていた。それが、人間形成の論理としての「人間的陶

33) *ibid.*, p. 185.

34) *ibid.*, p. 188.

35) *ibid.*, p. 185.

治 human culture」の概念であった³⁶⁾。

「われわれが、知力、趣味、道徳において、人間本性を高揚させ、それを威厳のあるものにするすべての改善を、おこなうことができるのは、これら（＝自然が、われわれの精神に、種子をうえつけただけで、そだてぬまにまかせておいた力能と能力）の適切な陶冶によってであり、それにたいして、他方で、それらの無視や歪曲は、人間本性の墮落と腐敗をつくりだすのである。³⁷⁾」

リードは、「知的力能」や「能動的力能」といった精神力能の強化に人間の到達点をもとめるかぎり、事物の世界の認識や道徳的完成という問題においては、人類の反省によって熟考する理性にアピールするのであって、かれらの「ふつうの確信 common conviction」にアピールするのではなかった。したがって、そのかぎり、たとえ本能的な知覚力としての外部感覚の存在とその作用を強調しようとも、かれはけっきょくは、そのような外部感覚とそれにみちびかれる「大衆 vulgar」の側にたつのではなく、理性と「哲学者」の側にたっていたのだということが出来る。ビーティは、リードによるこうしたコモン・センスと理性の分離と後者の優越化を、かれのヒュームへの追従と形而上学への傾斜ととらえるのである。

したがって、ビーティの眼前には、「われわれ合理的自然のふたつの力能」である理性とコモン・センスの対抗と協和という問題がたちはだかっていたといえる。そのために、このふたつの力能を、それらの「区分」と「関係、相互依存、管轄範囲」にわけて論じようとする。第一の問題では、「真理の探

36) 篠原久 前掲書、第7章のモチーフは、リードの道徳哲学の特徴がこの点にあったことをあきらかにすることにおかれている。したがって、そこではリードの三部作すべてをふくめて、かれの思想的全体像を解明しようところみられているものの、「外部感覚」論と「能動的力能」論の分析が中心におかれ、「知的力能」論の分析は欠けている。

37) Thomas Reid, *op. cit.*, p. 98.

究と知覚は、ふつう、われわれの理性的諸能力に帰されている³⁸⁾と指摘して、この先行する一般的見解の検討からはいっていく。そのけっか、確実な真理は、これら一般的見解がすべて理性に帰着させるように、かならずしも単一ではなく、「直観的に知覚される真理」と「証明の結果として知覚される真理」があり、同時に、それらに対応して、真理を知覚する能力もまた、それぞれ存在することを強調する。こうして理性とコモン・センスを、「それによってわれわれが証明の結果として真理を知覚する能力」と「それによってわれわれが自明の真理を知覚する能力」に区分し、形而上学が否定的に位置づけていた自然的本能的な知覚力としてのコモン・センスを、まずすくいだす³⁹⁾。

つづいて第2の「関係、相互依存、管轄範囲」の問題では、理性とコモン・センスそれぞれの、真理の知覚力としての固有の作用と意義をみとめる一方で⁴⁰⁾、「過度の推理がかれら（＝人間本性の科学者たち）を狂わせた」点を問

38) James Beattie, *op. cit.*, Vol. I, p. 20.

39) *ibid.*, Vol. I, p. 21. ビーティは、それぞれにさらに厳密な定義をあたえている。理性とコモン・センスそれぞれについてあげておこなう、つぎのように説明されている。

「すでに知られている諸関係あるいは諸観念から、まだ知られていないといったものを、われわれに探究することを可能にし、それなしにはわれわれが、真理の発見において、最初の原理ないし直観的な公理をこえて一歩もすすむことのできない能力。」*ibid.*, Vol. I, p. 25.

「漸進的な議論によってではなく、瞬間的本能的な衝動によって、真理を知覚し、あるいは確信を命じる、あの精神力能で、教育にも習慣にも由来するのではなく、本性に由来し、その対象がしめされるばあいにはいつでも、既成の法にしたがってわれわれの意志から独立して作用し、それゆえ不適切でなく感覚とよばれ、そして、同様なしかたで、すべてのひとに作用し、それゆえ適切にコモン・センスとよばれる、精神力能。」*ibid.*, Vol. I, pp. 26-7.

40) なかでも理性については、つぎのようにのべている。「理性はすぐれた能力で、その固有な範囲内に保持され、有益な目的に適用されるばあいには、人間被造物を非凡な存在の地位とっていいものにまで高める手段となる。」*ibid.*, Vol. I, p. 29.

題にとりあげる。それによってかれは、ヒュームをはじめおおくの形而上学者が理性にあまりにもおおきな力能をあたえるけっか、理性への過信が神や道徳を無視し否定するように「人類を誘惑し、当惑させ、哲学を軽蔑すべきものにし」たことを指摘して、それを糾断する⁴¹⁾。そのために、かれらとは逆に、理性にたいするコモン・センスの作用の本性性と強力性を強調し、ひいては前者が後者に従属すべきものであることを主張するのである。

したがってビーティは、ヒュームが事物の実在性を否定し、それをたんに印象と観念の習慣的な接合にすぎないとして、その知覚を、それらの接続と継起の推理にもとめたのとは反対に、「自然は、われわれの外部感覚と内部感覚によって、われわれにはなしかける」という自然的本能的な知覚力の存在と、コモン・センスは、事物が「実体的で単独で、独立した実在を有することを、われわれにつげる」という、事物の実在性のふたつを、前提におく⁴²⁾。そして、そこから「われわれの本性の構造が、われわれに信じるよう作用するものが、真理であり、われわれの本性の構造が、われわれに信じないよう作用するものが、虚偽である⁴³⁾」という一般的原理をみちびきだし、つぎのような論理で根拠づけようとする。すなわち、わたしが石にさわるとき、一定の感動をうむ。この感動は、石の硬さそのものでもなく、硬さににたものでもなく、心のなかの感動ないし感じにほかならない。しかし、この感動が、外的で堅固な物質の、肉体の一定部分への付着によってかきたてられるという、さからいえない確信をともなう。そこでわたしは、外的事物が存在し、硬いことを、硬さの感動、あるいは硬い物体にさわっているという記号であると経験によって知る感動を、わたしがうけとり気づいていると信じるのとおなじくらいおおきな確信をもって、また不可避免的に、信じる⁴⁴⁾。つまり、事

41) *ibid.*, Vol. I, pp. 30 & 31.

42) *ibid.*, Vol. I, p. 30.

43) *ibid.*, Vol. I, p. 19.

44) *ibid.*, Vol. I, pp. 19 & 38.

物の出現にともなう感動によって、心は、それが存在するよう作用され、また作用されることによって、それが存在すると確信されるのである。こうしてビーティは、感覚が事物の真理と虚偽を知らせ、感覚の感動によって信じるよう作用されるところに、事物の真理の根拠をもとめるのであり、そのことを、数学的推理、外部感覚、内部感覚ないし意識、記憶の証拠、因果推理、蓋然的ないし実験的推理、類比的推理、証言への信念にわたって検討を加えていく。それによって、結果はつねに同一で、あるものは理性によって証明され、他のものは信念によってうけいられるにちがいないが、すべてコモン・センスに一致するにちがいないことをあきらかにし、そこから「すべて推理は第一原理でおわる」、「すべて証拠は究極的には直観的である」、「コモン・センスは人間にたいする真理の基準である」と結論づけて、つぎのよう

にいう。

「われわれは、おおくのものごとを、証明なしに信じることをのぞけば、まったくなにも信じることができず、それは、すべて健全な推理が、究極的にはコモン・センスの諸原理に、つまり直観的に確実な、あるいは直観的に蓋然的な原理に、基礎をおくにちがいないからであり、したがってコモン・センスは、真理の究極的判定者で、理性はたえず、それに附随して行動するにちがいない。

「それゆえ、コモン・センスは、すべて真理と一致するにちががなく、これがその固定・不変の規準である。そして、コモン・センスと矛盾し、あるいはその基準と一致しないものはどんなものも…真理でなく、虚偽である。⁴⁵⁾」

これまでみてきたように、リードは、ヒュームが事物の实在性を否定し、因果律や自己同一性までも解体しそうになっていることに、つよい危機感をもった。そのために、あらためてその实在性を主張するとともに、人間にそ

45) *ibid.*, Vol. I, pp. 90–1. See also, p. 31.

れを知覚する自然的力能のそなわっていることを強調するのであった。そこにとりあげられたのが、かれのコモン・センスであった。しかしかれは、このコモン・センスによって「ふつうの生活」において獲得される確信に、絶対的な信頼をおくことができず、むしろ「日常の慣習的な（怠惰な）思考の流れを、自己統御の努力により中断させ、精神の諸作用を『注意深く』反省する⁴⁶⁾」理性の作用のなかに、事物の実在性とそれについての真の確信をみいだすのであった。こうしてリードが、事物の実在性を否定し、因果律や自己同一性までも解体しそうとなるヒュームの危険性を、類比方法と反省方法、大衆のコモン・センスと哲学者の理性を並置することによってのりこえようとするにとどまったのにたいして、ビーティは、理性を放棄しコモン・センスに全面的に依拠することによって解消しようとしたのであった。したがって、ビーティのコモン・センス理論の独自性は、リードのこころみたヒュームの観念の連合理論と懐疑主義の批判を、形而上学の全面的な排除によって、いっそうの徹底化をはかるとともに、同様にしてリードの知覚理論と精神力能論におけるコモン・センスと理性との二元論を、前者の側に一元化しようとした点にあったといえる。その意味で、それは、ヒュームの観念の連合理論とリードの人間の精神力能論の両面批判をめざすものであった。

さらにビーティと穏健派牧師知識人との関係についていえば、1750年代にスコットランド教会内でくりひろげられた、ヒューム（ならびにケイムズ Henry Home, Lord Kames, 1696–1782）の懐疑主義と無神論をめぐる民衆派＝福音派と穏健派のあいだの糾弾と擁護の論議は、そのまま両者の関係をしめすものといえる。1753年に、ある学校礼拝堂付牧師のジョージ・アンダスン（George Anderson, 1676–1756）が、ヒュームとケイムズの著作をとりあげて、その無信仰を攻撃し、穏健派がかれらとの親交をふかめていることに抗議をしたとき、かれらは、それを無視し、1754年に設立される「エディ

46) 篠原久 前掲書、204 ページ。

ンバラ選良協会」にヒュームとともに参加し、ますます親密度をふかめていった。そのために民衆派がさらに追撃して、1754 年の教会大会でふたたびヒュームとケイムズを非難するキャンペーンを展開し、その非難を可決したとき、穏健派は、ヒュー・ブレア (Hugh Blair, 1718–1800) が代表して応戦し、公式にこれらふたりを擁護するのであった⁴⁷⁾。ヒュームをめぐるこの非難と擁護という点からとらえれば、ビーティはあきらかに穏健派と対立し、民衆派の側にたっていたといえる⁴⁸⁾。じじつ『真理論』第 2 版の「あとがき」で、かれにたいしてなされた批判に反論して、穏健派とヒュームを一体にとらえて批判をおこなっている⁴⁹⁾。したがって、「ケイムズ、ロバートスン、ジョン・ヒューム、アリグザンダー・カーライル、それにおそらくはアダム・ファergusンも、ビーティのヒューム攻撃を否認したとおもわれる」と N. T. フィリプスンが指摘するのも⁵⁰⁾、ビーティの思想も対応も民衆派に近似している以上、当然なことであった。

しかし、ヒュームからリード、ビーティにいたる流れのなかで、ビーティが、懐疑主義にたいする批判とともに知覚理論における感覚的一元化をはかったとはいっても、その意義を、字句どおりにうけとることはできない。第一に、形而上学を否定し排撃するところから、『真理論』で、真理や理性、

47) R. B. Sher, *Church and university in the Scottish Enlightenment : The Moderate literati of Edinburgh*, Edinburgh 1985, pp. 61, & 65–7. なお、この著作については、筆者は、べつの機会にかんたんな紹介をおこなった (『日本 18 世紀学会年報』第 1 号, 1986. 5., 49–50 ページ)。

48) 篠原久 前掲書, 15–6 ページ註(29)は穏健派に属する知識人に言及して、ビーティをふくめ、リード、キャンブル、アリグザンダー・ジェラードの 4 人を、すべてアバドニアン・モダリッツとして一括して、そのなかにあげている。しかし、ここに指摘した点からいって、ビーティを穏健派知識人のなかにふくめるのはあやまりである。

49) J. Beattie, *op. cit.*, 'Postscript', Vol. I, p. 326.

50) N. T. Phillipson, James Beattie and the defence of common sense, in *Festschrift für Rainer Gruenter*, Hrsg. von Bernhard Fabian, Heidelberg 1978, p. 153.

コモン・センス等の主要概念の定義をあたえながら論証をすすめるという手法がとられるにしても、それらはきわめて粗雑で、このあとみる本稿の中心対象であるスチュアートによって、ことごとく論駁されるように、じつに矛盾にみちたものであった。それにもまして、『真理論』では、批判そのものにウェイトがおかれているために、概念の規定からはじまって、原理の根拠づけと、それらの体系的な組み立てにいたる一連の作業は、かれの関心にはおかれず、「真理の知覚にともなう精神現象のいくつかに注意することで満足する」ととどまっている⁵¹⁾。したがって、「真理論」の哲学的考察そのものとしては、きわめて薄っぺらなものとなり、しかも哲学にとって致命的な、定義と論証を曖昧にすることとなる、「穏喩的表現」がかえって積極的に駆使されることが、弁明されるのである⁵²⁾。

また、ビーティは、ヒュームの懐疑主義哲学を攻撃するのにあたって、その基礎にある形而上学的推論を否定するけっか、理性が人間を放縦にむかわせ、宗教と道德の破壊にみちびくという、そのネガティブな側面を強調し、それが積極的に秩序をつくりだし推進していく、ポジティブな面には目をつぶる。だが、ヒュームの懐疑主義は、直接的には、われわれが保持する確信の本質を、冷静に反省し、それらの信憑性を、その起源にまでさかのぼって厳密に検討しようとする、徹底した分析的な方法にこそ、独自性があった。したがって、そうした冷静厳密な推理を旨とするヒュームの理性は、すでに現存する既成の秩序や原理を無条件に前提するのではなく、現実のなかに形成されつつあるそれらを、冷静に把捉していこうとする、いくなれば自然と社会の形成力をもつものであった。その点からいえば、一方で、なおキリスト教道德の支配が消えない当時であって、それに積極的に「荷担」し⁵³⁾、他方

51) J. Beattie, *op. cit.*, Vol. I, p. 18.

52) *ibid.*, Vol. I, p. 28.

53) *ibid.*, Vol. I, p. 3.

で、「事実と経験へのアピール」と「もっとも身近な例証と事例」、「表現の簡明さと明晰さ」によって、「この種（＝人間本性）の研究にさほど熟知していない者にたいしてさえ、それを理解しうるものにしそこなわないとのぞむしかたで、論じようとす⁵⁴⁾」るビーティの意図は、けっして大衆に根をおろしたものではなく、かえって既成の秩序や原理を前提にしたうえで、かれらを、それらを積極的に擁護し推進していく存在たらしめようとすることにあったのだといえる。したがって、そのようなビーティのコモン・センス理論は、本能的なコモン・センスではなしに理性の反省力と自己統御にうったえるリードの教養知識人的世界観とくらべても、はるかに伝統的、旧守的なものであったといわざるをえない。この非科学的な性格と、保守的というより反動的ともいうべきイデオロギー的性格の両面からいって、ヒュームがストゥローン (William Strahan, 1715–85) にあからさまにした「あの頑迷固陋で間抜けな相棒ビーティ⁵⁵⁾」というレッテルは、じつに本質をついたものであったと、評価することができる。また、すでにみたように、スコットランド啓蒙の主流である穏健派牧師知識人のビーティにたいする評価が、冷ややかであった以上、『真理論』は、たしかにセンセイショナルな衝撃をあたえたとはいえ、当時の思想状況をかえるほどの意義を、ほとんどもちえなかった。しかも、このあとにドゥーゴルド・ステュアート (Dugald Stewart, 1753–1828) が登場し、むしろリードの『人間の知的力能論』と『人間の能動的力能論』を基礎にいっそうの整備と展開をはかるけっか、スコットランドのコモン・センス哲学の流れのなかで、これら両者の名声がますのにつれて、そこにおけるビーティの地位は、いっそう小さなものとなっていった⁵⁶⁾。

54) *ibid.*, Vol. I, p. 13.

55) Hume's letter to William Strahan, October 26th, 1775, in *The letters of David Hume*, ed. by J. Y. T. Greig, 2 vols., Oxford 1969, Vol. II, p. 301.

56) Dugald Stewart, *Elements of the philosophy of the human mind*, London 1792. ditto., *Outlines of moral philosophy : For the use of students in the University of*

3 スチュアートのビーティ批判と実証主義的応答

しかしそうとはいえ、『真理論』が出版以来たいへんな反響をよび、物議をかもしたこともまた、まぎれもない事実であった。ジェイムズ・ステュアートが『真理論』の第2版をとりあげて、批判的考察をこころみるのは、それが出版された1771年からしばらく経過した1775年のことであるが¹⁾、その前年までにはやくも5版をかさねるように²⁾、ビーティのヒューム攻撃の評判は、おとろえるどころか、むしろ知識人のあいだに活発な論議をうんでいた。そのけっか、一方では、ストゥローンが報告するように、ヒュームは、『真理論』の出版によってかれの『若干の主題についての論文集』の売れゆきが傷つけられたことに、いらだちをおぼえることとなる³⁾。それが、前節末尾に指摘したビーティにたいする決めつけとなり、ついには、死後出版となったそ

Edinburgh, Edinburgh 1793. ditto., *The philosophy of the active and moral powers of man*. In the two volumes. Edinburgh 1828. なお、D. スチュアートについては、篠原久「ドゥーガルド・ステュアートの道德哲学—「自然法学」と「政治学」をめぐる—」(田中正司, 前掲編著所収)はじめ, 同氏の「ドゥーガルド・ステュアートとスコットランド啓蒙思想—「経済学講義」をめぐる—」(『上ヶ原三十七年—久保芳和博士退職記念論集—』創元社, 1988年所収), 「D. スチュアート経済学における理論と実践—「正義と便宜の一般的諸原理」をめぐる—」(『経済学論究』42-2, 1988. 7.), 太田要「デューゴールド・ステュアートのポリティカル・エコノミー」(『立教経済学研究』41-4, 1988. 3.), 同「ドゥーガルド・ステュアートにおける人口と富—古典学派の時代における重農主義—」(同誌, 42-2, 1988. 10.)を参照せよ。

- 1) Anecdotes of the the life of Sir James Steuart, bart., in *The works, op. cit.*, Vol. VI, p. 384.
- 2) 『真理論』は, 1770年の初版の出版につづいて, 第2版が1771年にあらわれ, さらに第3版から第5版がそれぞれ年をついであらわれるというように, たいへんな人気を博した。Cf. T. E. Jessop, *op. cit.*, p. 97.
- 3) M. Forbes, *op. cit.*, p. 76.

の生前最後の「新版」の「緒言」で、「今後、著者としては、以下の諸篇だけが、著者の哲学的な諸意見と諸原理をふくんだものとみなされることを、ねがう」とのべて、リードやビーティはじめおおくの批判者がいつまでも攻撃のほこ先をむける、若き日の著作『人間本性論』を、抹殺するまでにいたった⁴⁾。他方で、『真理論』は、スコットランドはもとよりイングランドでも、非難におとらず歓迎をうけ、ビーティは、アバディーンとオクスフォードの両大学から法学博士の学位を授与され、またジョージ3世から2度の謁見をゆるされるとともに、200ポンドの終身年金をあたえられた。さらに、みずから固辞して実現はしなかったが、イングランド教会のなかから3つの聖職禄を提供されるとともに、エディンバラ大学から、空席となった道德哲学の椅子を提供された⁵⁾。

したがって、ステュアートは、このような反響の大きさから、購入後しばらくしてあらためてその著作に関心をいだくにいたったと、推測することができるかもしれない。そして、懐疑主義哲学をめぐる、世評がヒュームとビーティにたいする非難と擁護ではげしくゆれるなかで、それに割ってはいろうとしたのだともいいえよう。だが、ビーティが排撃した形而上学にたいする関心は、ステュアートのなかに、そうした要因とはべつにすでにはやくからもたれていたとおもわれる。それというのも、ステュアートは、1708年のウィリアム・カーステアズ (William Carstares, 1649-1715) によるスコットランドの大学改革をへて、そのもとでそだったあたらしい世代の知識人が簇生し、

4) D. Hume, *Essays and treatise on several subjects*, in two volumes, a new edition, London 1777, Vol. I, 'Advertisement', compiled in David Hume: *The philosophical works*, ed. by T. H. Green & T. H. Grose, in 4 volumes, repr. of 1882 edn., Aalen 1964, Vol. I, p. [5].なお、この「緒言」は、『人間悟性の研究』(福鎌達夫訳、彰考書院 1948年)(1)―(3)ページに訳出されている。

5) *DNB.*, Vol. II, p. 24. E. H. King, James Beattie's *Essay on truth* [1771]: An eighteenth-century 'best seller', *The Dalhousie Review*, Vol. 51, 1971, p. 391.

日増しに知的社会的な革新の気運がつよまる 1720 年代の半ばに、ヒュームにややおくれてエディンバラ大学に入学する。そして、ヒューム同様に、当時の改革された教授布陣のウィリアム・スコット (William Scott, 在任 1708-29) とコーリン・ドゥラモンド (Colin Drummond, 同 1708-30), ロバート・ステュアート (Robert Stewart, 同 1708-42), ウィリアム・ロー (William Law, 同 1708-29) の指導のもとで、それぞれギリシャ語, 論理学と形而上学, 倫理学と自然哲学, 気学と道德哲学をまなぶのであった⁶⁾。しかも, そこでつちかわれたそれらの素養が, その後も継続して探究されたことは, ほとんどうたががなく, なかでも論理学と形而上学にかんする研鑽ぶりは, のちにみるように, 『原理』における推理方法の確立のなかに, 遺憾なく発揮されている。他方, 同時に, ステュアートが『真理論』とならんで批判を加えていくこととなる, ドルバックの『自然の体系』もまた, 『真理論』とおなじ 1770 年に出版されていた。このことをかんがえあわせれば, ステュアートは, 『原理』を出版したのち, 『ラナーク州の諸利害』その他の経済学的論説を著す一方で, そのような科学的推理方法の再検討に, ちょうどこの時期, あらためて本格的に取り組もうとしたのだとかんがえられる。したがって, 『真理論』と『自然の体系』についてのふたつの批判的「考察」は, ともにそのような再検討の努力の産物であったといえよう。

これらのことを念頭におくならば, 『原理』において, 科学的推理方法の確立と原理の概念化, さらに諸原理の体系だった演繹化がはかられるのにあたって, 『人間本性論』もまた, 当然ながら, 必須の素材のひとつとしてかれに精通されたと, 推測される。このあとみていくように, ステュアートは, ヒュームの思想にたいして, 『人間本性論』もふくめ, すでに明確な, それも

6) Sir Alexander Grant, *The story of the University of Edinburgh during its first three hundred years, &c.*, in two volumes, London 1884, Vol. I, p. 262, & Vol. II, pp. 322-3, 328, 335-6, 348-9. E. C. Mossner, *The life of David Hume*, second edition, Oxford 1980, pp. 41-4.

かなり近い評価をもっていた。したがって、ビーティのこのきわめて挑戦的な著作をとりあげ、そこでのヒューム攻撃とコモン・センス論を検討することによって、かれ自身の懐疑主義理解と、形而上学、論理的な方法的認識の再確認をしようとしたのだとおもわれる。ここでは、「『真理論』についての諸考察」に即して、ステュアートが批判を加える論点を整理することから、まずはじめよう。

ステュアートは、はじめに、ビーティの『真理論』が、ヒュームの懐疑主義の打倒を中心主題にし、コモン・センスが真理の究極的な規準と同時に懐疑主義の無意味さを証拠だてる原理に基礎づけられていることを、指摘する。そして、このような概括をしたうえで、ビーティのコモン・センス論と懐疑主義批判を中心にすえ、考察をおこなっていくのであるが、それにさきだつて、真理の規準それ自体の検討からは始めている。

そのばあい、ステュアートは、真理はすべて「固定・不変・永遠なもの」とみなされるところとした、ビーティの真理の定義を、まず確認する。そのうえで、この定義とともに同時にビーティが、真理には確実な真理と蓋然的な真理があるが、ここでは、それについての確信が「いかなる疑問ないし不確実性にも染まっていない種類の真理」である前者に限定するとのべていることをとらえて、それぞれの論述における背理と相互の矛盾について論及する。そこから、ステュアートはまず第一に、ビーティの真理の規準はなんであれ、それがその「真理性の、確固たる確信だけになってしまう」ことをあきらかにするとともに、「この確信がどのようにして（固定・不変・永遠な）真理とよばれることができるかは、わたしにはまったく明白でない」と反論する⁷⁾。

つづいてステュアートは、ビーティがそれらに加えて、確実な真理には直観的に知覚される真理と、証明の結果として知覚される真理とがあり、前者はコモン・センスの対象であり、後者は理性の対象であるとのべていること

7) J. ステュアート「『真理論』についての考察」158 ページ。

に言及する。そして、この論述にたいして、「確実な真理についての定義……をあたえるかわりに、この問題についてのこういう説明（＝確実な真理のふたつである直観的に知覚される真理はコモン・センスの対象であり、証明の結果として知覚される真理は理性の対象であるということ）に固執したならば、かれは、なんの反対にも出会わなかっただろう」と批評を加える⁸⁾。こうした論評は、ステュアートが、ビーティが真理を知覚する精神力能の存在することを論じている点には同意する一方で、確実な真理についての定義と規準を「いかなる疑問にも染まっていない確信」にもとめている点に、批判をむけていることをしめしている。したがって、このような批評をおこなうことによって、ステュアートは、ビーティが、真理の規準の問題とその知覚力能の問題とをゴッチャにし、後者によって前者を根拠づけようとする懂着を突くのであった。

そこでステュアートは、このような真理の知覚力能の存在にかんする論述をうけて、ビーティのコモン・センス論そのものの検討にうつっていく。それは、すでに前節の註で紹介したように⁹⁾、瞬間的本能的不可抗的な衝動であり、本性に由来して、意志から独立して作用する感覚的力能であった。ところが、ビーティは、そうした定義をあたえる一方で、同時に「コモン・センスの欠陥によって、われわれは、背理的な原理を採用する」、「あのコモン・センスは、他の本能同様、ほとんどわれわれの配慮なしに、完成に到達する」、「推理の技術を、あるいは議論の技術をおしえることは、かんたんであるが、コモン・センスを、それを欠いたひとにおしえることは、不可能である」といった点を、あわせて強調するのであった。ステュアートは、こうした論述の対比をつうじて、そこには、本性に由来し、瞬間的本能的で、意志から独立して作用する精神力能が、一方ではそれほどまでに改善されることができ、

8) 同訳、159 ページ。

9) 前節 註(89)を参照せよ。

他方では効果のないものにされるという、「相容れない性質の矛盾」のあることを指摘すると同時に、それらは「和解させることができない」と批判を加える¹⁰⁾。さらにそのことに加えて、ビーティのそのような見解は、「両極端のあいだにあり、われわれの本能、感覚いずれの見解とも両立せず、そして、たしかに、定義においてそれにあたえられた性質とも、一致しない」と指摘する。ここから、ステュアートは、「この『試論』の第1章で、ビーティ博士が、一般的には不変の真理とかれがかんがえるものについても、個別的にはコモン・センスについても、なんの満足すべき見解もあたえ」ず、したがって「第1章におかれたこのもろい基礎のうえに、著者はまさしくかれの研究にすすむのである」と結論するにいたるのである¹¹⁾。

ステュアートは、『真理論』全体の基礎をなすその第1章にたいして、このような全面的な否定にちかい結論をくだしたのち、さらにコモン・センスにたいする検討をつづける。まず第1に、ビーティにおいてそれまでは、コモン・センスが本能的で直観的な真理に限定されていたのにたいして、つづく第2章第3節の「内部感覚あるいは意識」論では、それが道徳的正邪と事物や命題の真偽の唯一の裁判官にされるのであった。しかも、そのばあいには、ビーティにあっては、それら正邪や真偽の判断における確実性が、外部感覚が感じるそれとおなじように確実なものと想定され、すべてコモン・センスに帰せられていた。このような論述にたいして、ステュアートは、人間精神がその本性によってすべての邪悪な情念と傾性から解放されているならともかく、かりにもコモン・センスが、正邪を判定する無謬の規則として、また不変の真理を判定する無謬の規則としてやくだちうるということには、まったく同意できないと反論するのである¹²⁾。

10) 前掲訳, 164 ページ。

11) 同訳, 163-4 ページ。

12) 同訳, 165 ページ。

これにつづいて、ステュアートは、ビーティが、おおくの事柄を証明なしに信じることをのぞけば、まったくなにも信じることができず、健全な推理は、すべて結局はコモン・センスの原理に依拠せざるをえず、したがってコモン・センスは、真理の究極的な判定者であり、理性はたえずそれに従属して作用するにちががなく、それゆえコモン・センスがその固定・不変の規準であるとのべていることを、問題にとりあげる。そして、この論述にたいして、コモン・センスが、真理を発見するために漸進的な議論を必要としないなら、すでに知られた事物からまだ知られていないものを発見する、漸進的な議論という道筋でしかすすんでいかないう理性は、「なんの役にたつこともでき」ず、コモン・センスだけがなんの漸進的な議論もなしに真理を発見することができるなら、理性は「それに従属するのではなく、それにとって無用であるにちがいない」と反論する¹³⁾。

さらにそのことに加えて、ステュアートは、ビーティが、もしコモン・センスが虚偽だと想定されるなら、すべて知識は消滅し、虚偽の論証すらそれ自体虚偽で、とるにたらず、それゆえ、ひるがえってそれは虚偽でありえないとのべている点をとりあげる。そして、この論述にたいして、それはまずい三段論法であるか、さもなければわれわれの感情が論証であることを容認しなければならないのか、いずれかであると反論する。そこからかれは、「われわれの感情がこれほどに確実であるならば、われわれは無謬であり、しかもそう想定するのは、筋がとおらない」と指摘するとともに、「われわれの単純感情を、理性の助けなしに真理の試薬とすること、意志によらない確信を、理性と論証のすべてにまさるものにすることは、わたしには新奇な学説だ」と結論するのである¹⁴⁾。ビーティは、われわれは事物の外的諸関係と適合性についてなにも知らず、したがって論証されたのをみるものごとを信じるのは、

13) 同訳, 172 ページ。

14) 同訳, 173 ページ。

その論証によるのではなく、われわれがそれを真理であると感じるからだ、主張した。それにたいしてステュアートは、「われわれは事物の永遠な関係と適合性についてなにも知らない、どのようにしていうことができるのか」と疑問をなげかけると同時に、それに反論して、この関係こそが不変の真理の唯一の特徴で、真理を不変なものにしうるのは、どんな命題においても、主語と述語の永遠な関係と適合性そのものにほかならないと、批判をするのである¹⁵⁾。

このような一連の批判的考察をつうじて、ステュアートは、ビーティが理性を放棄し、すべてコモン・センスに解消しようとしたのにたいして、前者の固有性をふたたび基礎づけようとするのであった。またそのことによって、真理のなかには、ビーティが強調した直接的本能的な感情によって知覚される真理だけでなく、理性によって証明の結果として知覚される真理の存在することを強調するのであった。しかも、そうした反論において、ヒュームとビーティとの違いを、「懷疑主義者は、かれが2と2は4ということほど完全に理解しないものは、なにも信じないのにたいして、博士は、内部感情から、かれが、真理という用語の容認で、真実であると確信するものは、なんでも信じる」点にみるように¹⁶⁾、ステュアートは、むしろそうした幾何学的、形而上学的な、論証によって信じることのできる真理をのぞいてなにも信じず、それ以外のあらゆるものについてうたがう、ヒューム的な懷疑主義者の立場を擁護し、それに立脚しようとしたのである。その意味で、この「『真理論』についての諸考察」は、ビーティのヒューム批判にたいする反批判とヒュームの擁護をめざしたものにほかならなかった。

ビーティのヒューム批判にたいする反批判は、前者にたいする喝采ぶりにくらべれば、はるかに地味なもので、特筆されるものとしてはわずかにプリー

15) 同訳、174 ページ。

16) 同訳、183 ページ。

ストリとゴールドスミスによってなされた批判をかぞえるのみであった¹⁷⁾。またすでに指摘したように、ヒューム自身にしたところで、たえず攻撃の的にされた若き日の著作『人間本性論』を抹殺するという対応をするだけであった。したがって、そのようにわずかな批判しかなされなかったことからするならば、ステュアートが、たとえ私稿の形態であったにせよ、ビーティの批判とヒュームの擁護を具体的にこころみたことは、じつに注目されるべきことであった。しかも、それによってビーティが、その直後の版で大幅な手直しをするのを余儀されたのであれば¹⁸⁾、なおさらその意義はおおきかったといえる。

しかし、ステュアートのこの「『真理論』についての諸考察」は、ただたんにビーティの批判とヒュームの擁護に終始したものではけっしてなかった。ビーティのコモン・センス論にたいする容赦のない批判のなかに、たとえ部分的であれ、かれ自身の認識理論の一端が具体的に開陳されているのである。そして、そこには、むしろヒュームの懐疑主義のいっそうの徹底化という特徴をうかがい知ることができる。それは、ある意味で経験主義の徹底化ともいっていい、「よりおおきな蓋然性の側にたつ」た懐疑主義の徹底化であった¹⁹⁾。しかも、ステュアートにおけるこのヒュームの懐疑主義の徹底化は、

17) J. Priestley, *An examination of Dr. Reid's Inquiry into the human mind on the principles of common sense, Dr. Beattie's Essay on the nature and immutability of truth, and Dr. Oswald's Appeal to common sense on behalf of religion*, London 1774. See also on Oliver Goldsmith, E. H. King, *op. cit.*, pp. 396-7.

18) 『真理論』の第5版は1775年に、第6版は1777年に出版されるが、このステュアートの批判をうけたビーティの手紙(1776. 4. 25.)で「わたしの書物は新版は、まもなくあらわれ、以前のどの版よりも改訂され、異論の余地のすくないものとなっているでしょう」とのべられているところから、ここにのべられた新版は、『真理論』に「詩歌と音楽について」その他を加えた1776年出版の『試論集』を指すとおもわれる。前掲訳、190ページおよびT. E. Jessop, *op. cit.*, pp. 97-8. を参照せよ。

19) 「わたしが、真理にかんするじぶん自身のかんがえを、説明しようとするばあい、わ

いっそうの経験主義化とともに実証主義への傾斜となって展開されているのである。その点を、かれは、因果連関の問題に関連して、懐疑主義においては、ひとは人生のあらゆるできごとにおいて、他のひとたちがするように仮説的に推理し結論し、感覚と感情によって立証され、そのひとたちの信じるあらゆる命題を、当然のこととおもうと認識されると、指摘したうえで、「しかし、わたしの懐疑主義は、仮説とはべつの対象をもっている。わたしは、なにがわれわれの感覚と知覚の証拠でありうるかを、探究するのではなく、この証拠が、数学的な論証の確実性にまで到達するかどうかを、探究する」のだと言明する²⁰⁾。それによって、理性でなしに日常的な常識感覚としてのコモン・センスを強調するとともに、現存するものをそのまま前提し積極的に擁護しようとするビーティの理論を、論証しえないものを前提し、かつそれに依拠しようとするものとして、批判を加えようとするものにほかならな

たしがであることのできる最善の工夫は、それがさまざまな対象に関連するにしたがって、さまざまな名称によってよぶことである。数学では、わたしは、それを論証とよび、真の形而上学では確実性と、道徳学では道徳的確実性と、物理学(すなわち外部感覚によるわれわれの知覚で、そうした知覚からひきただされるべきの結論を排除した知覚)では直観と、宗教では信仰とよぶ。・・・／わたしがこれらの基準のあれこれに達するためにまつけださない、命題はなんでも、真理よりも他の用語によって、すなわち蓋よ然性、可能性、不確実性、不明確性、非蓋然性等といったものによって、よぶ。しかし、わたしは、確実な真理でないものはなんであれ、それにかんして、わたしの心から、かならずしもあらゆる種類の確信を追放するわけではない。これは、全知者がおこなうと想定されうるのとおなじくおおくのことを、おこなおうとする、無駄な主張となるだろう。わたしは、よらおおきな蓋然性の側にたって信じるのであって、みから誤っていると知るばあいには、下着をかえるように、いさぎよくじぶんの意見をかえる。しかし、わたしがなんらかの命題を信じるというばあい、わたしは、それが真実であるという仮定のうえで推理し行為をおこなうということしか、意味しない。そこで、わたしは、これが懐疑主義者その他すべての人たちにかんする事例であるとみなす。」同訳、183-4 ページ。

20) 同訳、169 ページ。

かった。しかも、そうした実証主義への傾斜が、ビーティによる概念化と論理の矛盾を、立論に即して執拗に突いていくという、細密な考察となって展開されるのである。そして、「『真理論』についての諸考察」におけるこの実証主義の立場とその批判的考察の厳密さが、『原理』の厳密で錯綜し、繰り返し繰り返しそれまでの原理を確認しつつさらにさきにすすんでいくといった、しつこいほどに論理の細部に執着した叙述とつながるものであった。その点を最後にみておこう。

『原理』は、副題に「自由諸国民の国内政策の科学にかんする試論」とかかげられ、またその「まえがき」の冒頭で「本書は、国内政治の錯綜した利害を諸原理に還元し、それを正規の科学につくりあげようとする試みである²¹⁾」と明言されるように、近代社会の経済構造を原理的に解明するとともに、それによって経済学をひとつ独立した科学にまで確立しようとするものであった。しかも、そうした意図が、『原理』を「序論」の方法から第1篇「人口と農業」、第2篇「トレードとインダストリ」、第3篇「貨幣と铸貨」、第4篇「信用と負債」、第5篇「租税とその総額の適切な運用」によって構成するだけでなく、それぞれを論理的に緊密に結合させて展開するように、全体を、ひとつの完結した体系性をそなえたものにしようとしているのである。ここから、『原理』にたいして、すでにみたような「ブルジョア経済学の総体系をつくりあげた最初のイギリス人」や「最初の総経済学体系²²⁾」といった評価がなされている。

しかし、『原理』がそうした特徴をもつものであるにもかかわらず、その一

21) Sir James Steuart, *An inquiry into the principles of political economy : Essay on the science of domestic policy in free nations, &c.* In two volumes. London 1767, repr. [by the (Japan) Society for the History of Economic Thought], n. p., n. d., Vol. I, p. [v]. 中野正訳『経済学原理』(岩波文庫)(1)53ページ、加藤一夫訳(東大出版会)(1)3ページ。

22) 小林昇 前掲書, 17 ページ。

方で、ステュアートは同時に、体系を構築することにたいしてはきわめて慎重な態度をとり、とくにフランス人のいう「システム」を批判するとともに、「わたしは、どんな体系をも構築しようという意図はなく、人間本性に合致し、たがいに矛盾のない一連の原理を探究することによって、すぐれた体系を構造するためのいくつかの材料を準備するように、努力するものである²³⁾」とのべている。だが、体系を構築しようとするのと、それに慎重であろうとするとの、ステュアートにおけるこのふたつの傾向性は、けっして矛盾するものではなく、まずなによりも経済学をひとつの完結した体系をそなえた科学として樹立すること自体を否定したのではない。かれは、フランス的な「システム」にたいして、それが、帰納をつうじて諸原理をひきだすものの、「演繹をおこなうにあたって、じぶんの理解する観念の範囲をはかるにこえて、その原理の威力を拡張し」てしまう点を批判する²⁴⁾。したがってステュアートは、フランス的な「システム」にかわるあらたな科学的体系を樹立することをめざしていたのであり、そのために、まず、その前提としての確固たる方法論を確立するとともに、それによってそうした課題をはたそうとしたのである²⁵⁾。その点を、ステュアートは、『原理』のなしうることはせいぜいのところ、人口から租税にいたる近代の政治のなかでもっとも興味ぶかい領域にかんするいくつかの要素を、収集し整理することだけだとのべる一方で、しかしその本質は「諸原理の演繹」であって、「諸制度の寄せ集め」ではなく、「わたしは、推理の過程でえられる機会をつかまえては、叙述をすすめるのにつれてあらゆる原理を、それが関係をもちうるべきの部分の研究に関連づけようとした」と弁明する²⁶⁾。そのために、「計画のあらゆる部分に適用

23) Sir James Steuart, *op. cit.*, Vol. I, p. 5 中野訳(1) 75 ページ, 加藤訳(1) 34 ページ

24) *ibid.*, Vol. I, p. ix. 中野訳(1) 59 ページ, 加藤訳(1) 11 ページ。

25) ステュアートの方法論の特徴については、すでに小林昇 前掲書, 45-7, 151-2, 225-6 ページによって言及されている。

26) Sir James Steuart, *op. cit.*, Vol. I, p. viii. 中野訳(1) 57 ページ, 加藤訳, (1) 9 ページ。

されると同時に、ひとつの理念が他の理念へと規則的に生じるようにされる一連の理念をつくりあげていく明確な方法」の確立がはかれるとともに²⁷⁾、諸原理の演繹が、「真理の連鎖のひとつひとつの環を読者に把捉させる」ための、「綿密な推理」ないし「必然的な推理²⁸⁾」をかたちづくるものとして遂行されるのである。そして、こうした態度がスチュアートに、たとえそれが抽象的で無味乾燥、たいくつなものとすることになっても、さらには文体の優雅さを欠くことになっても、論理の明晰さをもとめさせていったのである²⁹⁾。そのことが、『原理』を、結果的に枝葉末節に拘泥し、それゆえに難解で錯綜したものにしたとはいえ、経験主義的、実証主義的な認識と推理の方法を、そこにおいて強調し貫徹させることとなったのである。

その点で、経済学を科学的体系にいたらしめるスチュアートの方法は、ある識者によって「演繹と帰納、抽象化と個別化との総合の方法³⁰⁾」と規定されるように、フランス的な「システム」が演繹を経験をこえて拡張しようとするのにたいして、むしろ経験的帰納によって諸原理をひきだすとともに、同時に諸原理の演繹化においてたえず経験を検証していこうとする、経験主義の徹底化を特徴とするものであった。これは、また同時に、「『真理論』についての諸考察」でのビーティにたいする批判の論点と共通するものにほかなかった。したがって、このようにスチュアートの「『真理論』についての諸考察」に着目することによって、形而上学と論理学にたいする関心と素養と、そこにおける経験主義の徹底化が、青年期から『原理』、さらには晩年にいたるまで、かれのなかに一貫して保持されていたことを、知ることができるであろう。そして、このように一貫して保持された形而上学と論理学の素

27) *ibid.*, Vol. I, p. 15. 中野訳(1) 90 ページ, 加藤訳(1) 51 ページ。

28) *ibid.*, Vol. I, pp. xiii, 5. 中野訳(1) 65, 74 ページ, 加藤訳(1) 17, 33 ページ。

29) *ibid.*, Vol. I, p.5. 中野訳(1) 74 ページ, 加藤訳(1) 33 ページ。

30) 小林昇 前掲書, 45 ページ。

養と、そこにおける経験主義と実証主義の徹底化が、『原理』における推理の「明確な方法」の樹立を実現させたのであり、また同時に、『原理』を特徴づけることとなる歴史主義的な認識方法を確立する基礎をなしたのだといえよう³¹⁾。

〈附記〉 本稿は、先に筆者の所属する機関から交付された「札幌大学研究助成」にもとづく成果の一部である。

31) この点に関連して、ステュアートの経済学体系が、稀有ともいえる歴史意識と発生史的手法をおおきな特徴としており、それが、エディンバラ時代、最初の歴史学教授となったチャールズ・マッキーのもとでまなんだ歴史学と古典学を基礎に、展開されたものであったことが、はやくも田添京二「サー・ジェイムズ・ステュアートとマッキー教授(1・2)」(『商学論集』49-4, 50-1, 1981. 3. & 7.)によって強調され、つづいて小林昇 前掲書はじめおおくの研究者によって、一段と強調されるにいたっている。しかし、かれの歴史主義的な方法は、この経験主義的、実証主義的な推理方法の基礎のうえに展開されたものであり、したがって、ステュアートの経済学にあっては、そこでの歴史主義的な方法的特徴が強調されるのにさきだって、それをうみだしささえっているこの経験主義的、実証主義的な推理方法の確立が、まず着目されなければならない。